Color Science Association of Japan

調をもたせ、模様に立体感を表現する。朱纐纈、紫纐纈、萌葱纐纈が本義とされている。

5. 匂

香の匂いは最初強く感じられるが、次第に薄れていく。人と行き交うそのすれちがいの時におきる,その情景を色の階調に表したもので強い色から次第に明るくなる。グラデーション配色といえる。例→紅→薄紅→白　薄様とも言う。

6. 裾濃

明るい色から次第に濃くなる階調。明るい浅葱色から藍色になり、紺色で終わるような階調をいう。

7. 村濃

「斑濃、叢濃と書くこともある」布地模様の1つで、まばらに濃いところが散在しているものを言う。貞状雑記に、【地を薄くして所々村雲のごとく何色にても色を濃く染める也】とでている。

8. 白と紺

江戸時代に度々奢侈禁止令が出されていて、染織品も制限されて絹物は使うことができなかった。染色も紫や紅花染めは高価なものだったから、庶民的な藍色、茶色、鼠色などが多く使われたが、藍染めが中心になっている。

9. 七福神の色

神社の幡の色：赤、黄、緑、青、白の幕が寺の本堂に飾られることがある。

われわれの周囲には成仏できない餓鬼がいる。その餓鬼を救う法要を施餓鬼（せがき）と言い、その時に餓鬼がその仏様（色で象徴させている）のところに行くと、功徳が施されるという。

10. その他

参考文献　歴世服飾考、染織辞典、むらさきくさ、色名事典、色・彩飾の日本史、日本伝統色・色名解説、日本の傳統色、京の色事典330、図説・浮世絵にみる色と模様、展覧会日本の色、源氏物語の色他

（カラースタジオ エヌ）

「日本の伝統配色」の演習について

内田　滋子

色彩は生活と結びついて歴史とともに今日まで続いている。色の意味を考える時、その時代的背景や地域性、その土地の気候・風土、そして人間の精神性をも理解し味わうことが大切だろう。日本の伝統色をひもといて歴史を辿る時、意識するしないにかかわらず日本人の心に、風土・文化に育まれた日本独特の色遣い、色目が脈々と刻まれていることに気づかされる。その色合いの持つ意味と色目の奥深さを現代の日常生活に生かすことで、豊かな色彩表現ができると考えて生徒指導を行った。

まず歴史的な流れの中で、大陸から渡ってきた色彩が日本独特の色彩文化を形成していくことを学ぶ。その色彩文化は政治・文化の中心が北上するにつれて色合いも変化していくこと。その時代における身分や職業とも深く関わっていること。また生活文化においては部屋の「しつらい」という物理的なものが精神的な意味へ移行していくこと。その中で茶室の究極的色彩文化へと集約され、「侘び」「寂び」の「粋」の世界が展開されていく。それはやがて江戸時代の奢侈禁止令により庶民の間に広がった茶と灰の粋な色彩文化の精神的土壌となったのではないか。また一方では、豪華絢爛な桃山時代の障壁画へと昇華していく。また、日常の色「ケ」の色に対し、祭り、芸能、非日常の「ハレ」の色という精神性を持つ色の深さとなって現れていく。

このように同時代においても二面性を持つ色彩文化、暗く沈んだ静かな色目、明るく快活でにぎやかな力強い色目。このような複雑多様な日本の色彩文化はヨーロッパの人々に魅力的に映り、影響を与えたことは想像に難くない。これら豊かな色彩感覚を有する日本人の感性は、現在も私達に遺伝子として受け継がれて地下水脈のように流れている。このように一連の伝統色の意味を学んだ上で、実際に演習を行う。日本の伝統色に対するテーマを決め、調べ、分析する。その上でその色を使い、新たに「日本の伝統色による洋食器の新作コレクション」の展示会ポスターを制作するという課題を与えた。このことにより伝統配色を現代に生かす発想を持たせた。配色していく中で日本の伝統色が実は偏ったものではなく、むしろヨハネス・イッテンなどの配色調和論に出てくる配色調和の形式をも含んだ非常に豊かでかつ繊細なものであるということを体得できると考える。

（㈲ 創作の森）

検定対策・ちょっと息抜きのためのツール・実験とゲーム

宮崎　敬子

検定対策の授業をする場合、授業時間が少ない、覚えることが多いなどの理由から、授業の内容が単調になりがちです。生徒が、「色彩」という本来楽し

NII-Electronic Library Service

Color Science Association of Japan

くあるべき科目を前にして、テキストの難解さゆえに、意気消沈してしまうのを見るのは、教える側としてつらいものです。対策講師の方々は、なんとか生徒のやる気を引き出そうと、様々の工夫をされていることでしょう。そこで、今回は、個人的に試した工夫のなかから、「楽しさ」を取り入れるための実験とゲームを紹介します。この実験とゲームは、ある美容専門学校の授業で行ったものです。一クラス30人くらいですが、カルチャー教室など、人数が少ない場合にも行えます。

実験は、「クロマトグラフィ」という色素分解です。美容専門学校でも近頃色彩の授業が積極的に取り入れられていますが、ヘアーカラーの概念の理解として最適だと考えます。ここから、実際のヘアーカラーの重要性の認識へとつながり、さらには検定取得の意欲向上へとつながることを期待します。

カルタに関しては、従来のカルタを色バージョンに改良した本当に単純なものですが、遊び感覚で取り入れることにより、「楽しさ」を感じてもらうことができ、また、いくつかの難易度の段階を設定することにより、チャレンジ精神を引き出すこともできるでしょう。 (Color Station)

「色彩講座のためのオリジナル教材」(ワークブック)
～「実践、カラーコーディネート」の紹介～
鈴木　千恵子

上記のワークブックのサイズはA4版、ページ数と形態は、本文24ページ片面印刷、表紙と裏表紙はコート紙で製本している。

配布場所は、全8時間以上の色彩講座(カラーコーディネーター検定3級講座を含む)にて、第一回目の講義で実費にて配布(購入をしてもらう)。

仕様は、A3の2つ折のクリアファイルに、130色カラーカードとセットしている。

検定講座には、「練習問題集&用語集」ほか、PCCSのカラーカード、そのほかの資料を添付している。PCCSのカラーカードを使う時は、色指定をした配色用紙を数枚配布している。

A3の2つ折のクリアファイルは非常に便利で、後から配布する資料も入れることができ、受講生も収納に便利である。

発行のいきさつは、はじめは、色彩講座の資料として数枚のレジメを作成していたが、自己の色彩への学習が深まるとともにページ数が増え、簡易製本機を購入して、製本をするようになった。

なるべく、資料をまとめやすく、手にした側も後で見てもわかるように、そして形に残る教材を作成したいと考えていたところ、ちょうど、1999年、ある専門学校での色彩の授業の受講生が200名になり、製本が間に合わず、業者に印刷を依頼した。その際に、内容の見直しをし、ページ数も増やした。2005年に2回目の改定をした。

受講生には、カラーカードを切り貼りして、講義で説明をしながら、色彩の基礎を学んでもらえるよう作成した。その教材を紹介したい。

「実践、カラーコーディネート」の1回の印刷部数は1回目(初版)が500部、以降200部である。

(A.I.C.)

参加型発表・慣用色名と色票の相対比較
永田　泰弘

一枚の実物の印刷色票を提示してその慣用色名を答えさせると、間違いの確率が高い。それに対し数枚の色票とそれらに対応する慣用色名との組み合わせを求めると、相対的に判断する形になり間違いの確率が低くなる。

その場合、色票の色の正確さも大切である。

最近は色彩教育や発表の場で色票をカメラやスキャナを介して映像化した二次データをパワーポイントの映像にして、プロジェクターやテレビモニターを通じて見せることが多くなってきているが、それぞれの機器の特性によって、実物の色票に対し色が変化することが予想される。

このような状態で色の相対的な比較選択が支障なく出来るのかどうかを検証してみることにした。支障が少なければ、色彩教育をパワーポイントとプロジェクターの組み合わせで行っても、色を伝えることが出来ることとなる。

実物の印刷色票を見せて相対的に比較選択してもらった結果と、映像化した色票による相対的な比較選択の結果を比較することにして、以下のテストを研究発表会の現場で行うこととした。参加型発表と名付けた所以である。

内容は四枚の印刷色票と四種の慣用色名を一組にして映像化し、正しい組合せを選択してもらう。印刷色票は「新版色の手帖」を切り抜いて作った。

使用した慣用色名は以下の9組、36種である。

1)桜色、鴇色、珊瑚色、牡丹色。2)朱色、紅色、茜

NII-Electronic Library Service